

術語の理解と図表の利用を基本とするレトリックの授業

畠山 浩昭

(桜美林大学)

1. はじめに

筆者は勤務校の学部と大学院においてレトリック学関係の科目を複数担当している。カリキュラム上の位置づけはそれぞれの科目で異なるが、「レトリックによるディスコースの批評と創造」を基本的な共通テーマとしている。履修している学部生や大学院生たちは、レトリック的な認識や思考、批評や表現の方法を学び、ディスコースに関する本質的、機能的な理解を深め、その諸問題について考察する活動を行う。最終的な目的は、学生個々人の興味関心や専攻の学習、研究に、レトリック学の知見を活かせるように導くことである。

授業では、「ディスコースの説得性」に焦点をあてる。学生の専攻が何であれ、その領域における物事の理解や表現のためのコミュニケーションがうまく機能しなければ、学びを深めたり、広めたりすることも困難になる。コミュニケーションとしてのディスコースに、明快な意味や筋の通った論などによる説得性が宿らなければ、事実も意見も主張も受け入れられず、結果として意図した物事も動いていかない。したがって、ディスコースの諸問題について学生が自分なりの答を見つけられるような授業になるように工夫を試みている。レトリック的な認識や方法が、学生個々人の学習や研究、将来的な活動に役立つことを主眼としている。

拙稿では、その具体的な方法として、「術語の理解と図表の利用を中心としたレトリックの授業」について報告する。まず、レトリック理論における「術語」とその体系は、様々なディスコースの創造や批評分析に強力なツールとして活用されてきた。言うまでもなく、学術の世界では、様々な現象や人間の実践の中から、本質的な特徴や一般的な機能として抽出できるものに名前をつけて術語とし、現象や実践を実現する体系として構造化し、理論としてまとめる。レトリック学においてもその長い歴史の中で、プラトンやアリストテレス、キケロの時代から継承され、開発され、体系化してきた数多くの術語がある。現象を理解したり、現象を創造したりする際に、術語を要素とした体系的な思考は欠かせないので、レトリック学においても、様々な術語の本質や機能を理解することは、重要な学習活動である。

また、図表は、現象を構成する要素間の関係性を考えたり、表したりすることに非常に有用である。図表で考えるということは、物事と物事の関係性を見極めることであり、事物間の論理性を探ることである。例えば、山田雅夫(2010)は、図解力という語彙を提示しながら、図解のメリットとして大きく5つ挙げている。(1)スピードに理解できる、(2)全体を把握できる、(3)むずかしいことを簡単に説明できる、(4)分析から発想まで幅広く使える、(5)思考プロセスを「見える」化する(p. 12)。特に、全体像を把握することや、思考を明確にできること、分析批評や創造的な活動にも使えることなどが、図表を用いる理由である。ひとつのディスコース現象を構築している要素は何か、また、

要素と要素がどのように関係して全体的な現象を実現しているか、といった問い合わせるために、術語と図表を組み合わせることが、分析にも創造にも役に立つのである。

ただし、構造がすべてではない。構造化することによって見落とす現象もある。しかしこのようなことに気づくことも、新たな発見や発想につながると考える。既存の術語や図表で表しても説明できないと思われるような現象や実践に遭遇する場合、必然的に、新たな概念や関係性を必要とすることになるので、結果として、イノベーション（改善や革新）やインベンション（発見）の可能性が発生するからだ。この授業を開発するにあたり、ヒントになったのは、イノベーションやインベンションを取り扱う経営学であった。常に新しい価値を追い求める経営学においても、そのような効果を期待して、図表が頻繁に利用される。レトリックはそもそも、説得的なディスコースによる他者への影響、思考や行動への効果をテーマにしており、レトリックの理論的な体系の各要素は、経営学でいうところのイノベーションやリーダーシップ、ストラテジーなど、問題解決や目的達成のための概念と相通じるところが多く、術語としても同じように機能する。これらの知見を基にして、学際的に展開する試行的なレトリックの授業として報告したい。

2. レトリック学の現代的な意義

諸学における「理論と実践」は、お互いに補完する形で成り立っているが、レトリック学も同様である。レトリックの理論的な体系は、説得力を生み出すディスコースの方法として学ばれたり、様々なメディアを分析批評するための枠組みとして利用されたりする。同時に、様々なディスコースの実践が、理論的な概念や体系のあり方に影響を与えることも事実である。現象をどのように認識すべきかという問題、その認識をどのように形式化して伝えるべきかという問題、その形式をどのように解釈すべきかという問題など、レトリックの学徒が取り組むテーマは様々である。理論と実践の間で、研究者は批評を試み、実践者は創造を試みる。

レトリックの理論と実践が対象とするのは、レトリカル・ディスコースである。アリストテレスは、レトリックについて「どんな問題でもそのそれぞれについて可能な説得の方法を見つけ出す能力である」とした（岩波文庫、31）。他にも数多くの定義が試みられてきたが、アリストテレスの「説得の方法を見つけ出す能力」という定義は一般的にも認識されており、現代においても、レトリックは説得術として理解されることが多い。

ただし、レトリック学について、現代的な問題もある。研究が時代とともに科学的になり、より客観的、絶対的な事実を抽出する方向に進んだため、総合的なレトリック学は、だんだんと論理学や文学、言語学、心理学などの諸科学に吸収、細分化され、それぞれの理論体系の中に埋もれていったことである。また、コミュニケーションやメディアが説得力を伴って人間の思考や行動に影響を与えるとき、そこに組み込まれた思想や意図された目的等が問題視される場合があり、その倫理性や価値、政治的思想などを批判する活動がレトリックの主な仕事として位置づけられるようになつた。レトリック学による様々なメディアやコミュニケーションの分析批評は、人間の認識や判断を正す方法論として、また、ディスコースの主体としての倫理性や謙虚さを啓蒙する手段として、継続的に行われてきた。つまり、レトリック学の細分化や批評中心の研究が、総体としてのディスコース実践をレトリックの授業から遠ざけることになったとも考えられる。

3. 大学におけるレトリックの授業

レトリック研究の現代的な動向からすると、総体としてのディスコース実践をレトリック学の授業に取り入れることは難しいのかもしれない。筆者が授業で教科書としても利用する『The Essential Guide to Rhetoric』(Keith, Lundberg, 2008)には、大学におけるレトリックの授業の問題について、全体的に学ぶ機会が少ないことが指摘されている(Preface)。パブリックスピーチやコミュニケーション学基礎などの科目はあるが、レトリック全体を把握するような科目が、特に学部レベルでは見当たらないという議論である。しかし依然として、説得力を伴う総体としてのディスコースの理解と実践は必然的に求められる。メディアの種類や情報の技術とインフラが整った現代においては、表現や発信、解釈や受信という語に代表されるように、コミュニケーションが活発に行われている。政治、社会、ビジネス、教育などは、目的の達成という視点から、レトリカル・ディスコースを必要とする分野であるし、メディアや情報技術が高度に発展した社会はレトリックの社会とも言える。このような社会で生きていく学生たちにとって、総合的なレトリック、理論と実践のレトリックを、自分たちの興味関心、専攻と合わせて修得する意義は大きいと考える。

筆者は授業で、『レトリック小辞典』(2002)を術語集として利用するが、その「はしがき」には、この辞典は「総体としてのレトリックを捉えるための体系的な試み」と記してある。術語と図表を利用する目的も、発想はこれと同じである。術語自体は、諸学で確立されたものも多いが、総体としてのディスコースに還元することなしには、知恵とならない。大学で取り扱うレトリック学も、理論と実践、批評と創造という側面を維持し、特に、実践としてのレトリックの総体性は、個々の学生に知識や技術として還元されるような工夫が必要であると考える。したがって、大学の授業の中でも、様々なディスコースの実践を取り入れることが必要である。特に現代の学生達が感知する違和感や、新世代の新たな思考が、新しいディスコースの実践を積み重ねていくので、それを可能にするレトリックの発想や知恵を授業で取扱うことが望ましい。

4. 術語から始める批評と創造

筆者がレトリックの授業を開発するにあたり、最も重視したのは、学生個々人が感じ取る「強めの思いや感情、または違和感」である。コミュニケーションを経験することによって起こる強い思いや感情が行動に変化を及ぼすという考え方とは、レトリックの基本である。また、私たちが認知、経験する様々な現象をことばで表そうとする時、「この語」ではないという違和感は、より正しい認識と表現に向かおうとする、真理を追い求める態度につながる。そのような特別な感覚を言語で処理することに困難を感じる時、既存の認識や表現方法から脱却し、新たな認識、表現への欲求が生まれる。これは、批評の最初の段階で、既存の認識や構造的な把握の枠組みを壊し、新しい道を開くための第一歩である。

説得性の高いコミュニケーションとは、結局のところ、オーディエンスがどのように感じるかによるところが大きい。従って特定のオーディエンスは、どのようにしたら納得してもらえるか、説得できるかという問い合わせに対するモデルは数多くあり、それはオーディエンスの理解であり、オーディエンスに

に対するアピールのあり方である。アリストテレスを中心とするレトリックの伝統では、エトス、パトス、ロゴスという概念が、理論的な術語として頻繁に議論される。エトスを考察する場合、その個人が有する資格や持つうる影響力について、産出するディスコースの内容に見合った知識や技術、人格等に焦点があてられ、その特有のコミュニケーションを創出するにふさわしい、信頼できる人物であるかどうかが問われることが多い。また、エトスという語が、倫理や社会的、集合的な精神面まで意味の領域として含有することを考慮すると、社会文化的な人間集団に受け入れられる人間であるかどうかという問い合わせも重要である。

パトスは、感情の状態を指し示す概念であるので、ディスコースに関する個々人の、その場その時の感情を考察するための鏡となる。ディスコースを産出する主体は、対象となるオーディエンスの感情を把握し、その変化を捉えながら形式化を図るので、パトスは言わば心の理（ことわり）を追い求める。そして、ロゴスは言語による理性的な活動であるが、古代ギリシャにおける考え方によると、ことばと論理はひとつのものとして捉えられていたので、ロゴスという語には、ことばによる形式化と論理性がひとつのものであるという意味が込められている。理性をことばにすることがロゴスである。従って、ことばによって理を持って対象を形にしているかどうかが、問われる。

エトス、パトス、ロゴスは一般的によく知られている概念であり、これらの術語を利用するだけで、ディスコースを分析したり、ディスコースを構築したりする活動の質がかなり上がる。エトス、パトス、ロゴスをディスコースの要素と考えて、それぞれの分析を行えば、個別のディスコースの評価を、ある程度できるのである。また、これらの概念を考慮しながらディスコースを構築することも珍しいことではない。コンポジションの基礎として扱われることも多い。

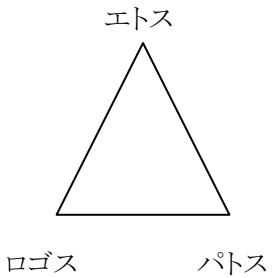
キケロ以降のレトリック理論にしても、基本的なディスコースの要素と概念があり、ディスコースの批評や創造に利用される。レトリックの5部門と言われるインベンション、アレンジメント、スタイル、メモリー、デリバリーといった概念は、説得的なディスコースを構築するために取り組むべきステップとして利用される。特に、発想や発見を意味するインベンションのステージ、配列や順序を意味するアレンジメント、文彩や修辞を意味するスタイルなどは、現代のメディア社会においてもかなり有効な概念である。

現代のディスコースの分析や創造には、このような古典的レトリックの概念だけではなく、時代や地域社会に応じた要素も重要になる。たとえば、現代のローカル、及び、グローバルな「社会」や「文化」等は、そのまま術語になり得るし、心理的な要素である「動機」や「意図」、また、「過去」「現在」「未来」などの時間的概念、そして「行為」や「意味」など、表象の内容や機能も、考察の対象になる。つまり、レトリック的に物事を考える際の関心ごとは、そのまま概念や要素となり、ディスコースの分析や創造のための重要な術語となる。

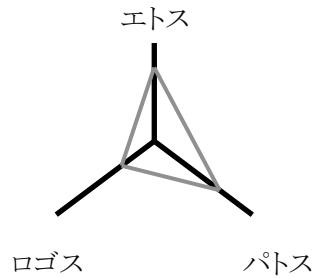
5. 術語を関係づける図表の効用

ディスコースの様々な要素を抽出し、言語化した術語は、それとして独立した概念であるが、ディスコースの全体性、総体性からすると、他の要素とどのように作用しあって効果を出すかという点において捉えられる必要がある。これは、分析にも創造にも共通する議論である。例えば、上述のエトス、ロゴス、パトスは、以下のような図表化が可能である。

図表 01



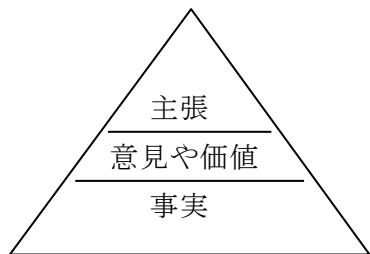
図表 02



図表01はレトリカル・トライアングルと呼ばれることもあり、エトスとロゴスとパトスにバランスよくアピールすることが大事であるというレッスンを教えるものであるが、図表02のようなアレンジにすると、少し見方が具体的になり、エトス、ロゴス、パトスについてどこまでアピールできているかという評価軸として機能する。エトス、パトス、ロゴスの術語は同じであるが、図表の作り方によって関係づけが代わり、総体としての扱い方が異なってくる。

他にも、議論法の理論の中で、文を「事実」、「意見や価値」、「政策的な主張」のように分類し、客観的な認識と主観的な認識に分けて整理し、主張を組み立てるという効果的なディスコースの方法論がある。事実は客観的にそうであるという表明であることに対し、意見や価値は、個人的、主観的な表明である。さらに、政策的な主張というのは、他者も巻き込むような行動を示唆する表明である。事実に基づいた意見が説得性を増し、意見に基づいた政策がより力を発揮するという議論である。これらを適切に区別してディスコースを組み立てることを教えてくれる理論であるが、このような考え方も、図表化によってその関係を明確にすると、より使いやすい道具となる。例えば、次の図表03のように整理すると、事実が意見や価値を支え、意見や価値が政策的な主張を支えるような構造が見えやすくなる。

図表 03



6. フレームワークとストラテジー

学生達がどのようなディスコース現象を取り扱うかということについては、彼らの興味関心や専攻による。学生達の専攻領域において、それぞれの術語や理論があり、実際の学習活動がある。これらを、フレームワークとなる基本的な概念や術語として、整理することが肝要である。例えば、経営や経済を専攻する学生の場合は、「ヒト」「モノ」「カネ」「管理」「営業」「企画」「人事」など、それとしての用語がある。文芸を専攻する学生の場合は、「プロット」「キャラクター」「セッティング」「葛藤」

「テーマ」など、主要な概念がある。あるいは、教育を専攻する学生にとっては、「教師」「教材」「環境」「カリキュラム」「プログラム」などが、キーワードになる。つまり、これらの概念と用語は、そのまま学生達が自分の専攻として取り組む様々な現象を構成する要素となっており、体系的に理解することになる。

一方で、そのような現象に伴うディスコースの評価や創造には、レトリックの知識が有用である。フレームワークの柱となる術語を基本にして、取り組みとしての目標をたてて、達成するためのストラテジーを考えるが、そのディスコースの評価や実践において、レトリック的な考え方が役に立つということである。すなわち、専門性に基づくプロジェクトを動かすという運営上の術語と、関わる人々の思考や行動を動かすレトリック上の術語が図表の中で相互に関係することにより、プロジェクトの評価や創造の質が高まるという発想である。

図表 04 ビジネス専攻の例

| | |
|---------|------------------------|
| 関係の分野 | 経済学、経営学、政治学、社会学など |
| フレームワーク | ヒト、モノ、カネ、管理、営業、人事、企画など |
| ストラテジー | ビジネスモデル、成長戦略、差別化など |

図表 05 教育専攻の例

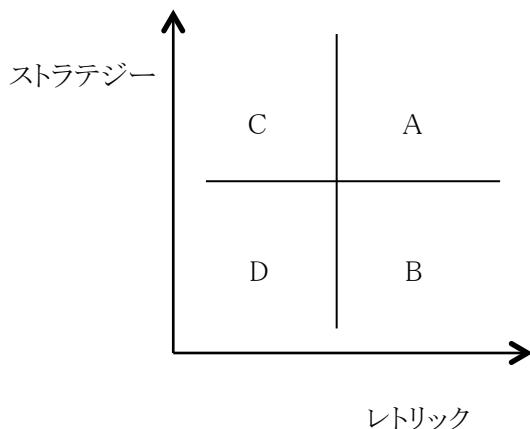
| | |
|---------|--------------------------|
| 関係の分野 | 教育学、心理学、コミュニケーション学など |
| フレームワーク | 教師、教材、環境、カリキュラム、プログラムなど |
| ストラテジー | 評価、レベル設定、スキル、インテグレーションなど |

図表 06 文芸専攻の例

| | |
|---------|---------------------------------|
| 関係の分野 | 文学、歴史学、哲学、美学など |
| フレームワーク | プロット、キャラクター、テーマ、セッティング、コンフリクトなど |
| ストラテジー | オーディエンスの設定、メッセージの確立、題材の選択など |

例えば、文芸専攻の活動として、歌詞を書くとする。歌詞を書くという作業と、歌詞がオーディエンスに影響を与える可能性を考える場合、様々な概念と術語を選び出すことができる。歌詩そのものに関する術語としては、「韻」「リズム」「パターン」「スタンザ」「キーワード」「テーマ」「サビ」「言語形式」「メッセージ」などがある。これに対し、オーディエンスへの効果を考えるレトリックに関する術語としては、「リスナーの特徴」「共有される思いや感情」「論理的アピール」「歌手のエトス」「社会的価値」「文化の特徴」「行為としての言語」「解釈の可能性」「コンテクスト」などが出てくる。つまり、「歌詞を分析する」とか「歌詞を書く」というプロジェクトについて、それ相応の専門的な理論体系があるものの、説得や納得を基本とするレトリカルなパワーとともに考察するために、レトリックの知見をプロジェクトに反映させるということである。

図表 07



様々な術語を組み合わせて、関係性を考えながら図表にしていくことで、総体としてのディスコースの分析や創造が、より具体的かつ確かなものになる一方で、そのプロセスの中で発生する違和感や満足し得ない感情の中から、イノベーティブな発想やソリューションも出てくる。どのような分野であれ、その専門性に加えて、ディスコースそのものに説得性が宿ることが、実践の成功に導くし、他の実践のより適切な分析や評価につながる。図表07で、ストラテジーが高く、かつ、レトリック性も多いAの領域に入るディスコースは、より質が高く影響力も大きいと考えられる。Bは、レトリック的な要素は高いものの、その内容は専門性に乏しい。Cは、専門性は高いものの、オーディエンスに対してのアピールが弱くなり、Dは、専門性もレトリック性も低いというディスコースである。

このように、様々な図表に術語を落とし込みながら、それぞれの学生達の問題や課題に応用できるような工夫をレトリックの授業で試みていることを報告させ頂いた。まだまだ課題は多いが、ひとつ的方法として確立できるように、改善していきたい。

引用文献

山田雅夫(2010)『図解力の基本』、日本実業出版社。

脇坂豊、他(2002)『レトリック小辞典』、同学社小辞典シリーズ、同学社。

Keith, William M., Christian O. Lundberg (2008). *The Essential Guide to Rhetoric*.
New York: Bedford/St. Martin's.